高齢者の事例検討（１４）

東海社会福祉科学研究所
大　北　秀　雄

認知症について、前回に続いて内容を紹介します。

⑩認知症の代表的な症状は、短期記憶障害と長期記憶障害の２種類があります。

「短期記憶障害」

新しい事柄が覚えられないことで、記銘力障害ともいいます。日常生活のなかで、寸前の出来事が思い出せず、同じことを何度も繰り返し、たずねたり、置き忘れやしまい忘れがおおくなり、いつも探し物をするなどがあり、また、今日が何月何日かも覚えられず、繰り返し、日にちを聞いたりします。

「長期記憶障害」

以前に記憶した経験や体験が思い出せないことです。卒業した学校名や以前の職業、子供や親しい友人の消息などが答えられなくなります。また、常識的な事柄についても思い出せなくなります。

⑪「認知症」の疑いがある場合としては、次の 4 項目のうちひとつでも該当があれば注意してください。

なお、記憶障害や抽象能力・判断力に障害があっても、それが、職業や対人関係などの日常生活に支障をきたしていない場合は認知症とはいいません。軽い物忘れだけでは認知症とはいわず、これらの結果、いろいろな失敗やミスが生じたり、誰かの指示や支援がないと日常生活ができなくなったレベルになって初めて認知症と診断されます。

「抽象的思考の障害」

・学校は何をするところ？といった単語の意味が的確に答えられないこと。
・牛と馬の類似点・相違点をいうことができないこと。
・同じ範疇に属するものを 3 つ以上あげられなくなる（例えば、食べ物、乗り物など）こと。

など、抽象能力に障害があること。

「判断力の障害」

日常生活や職業に関連した問題を手順よく計画的に処理できないことをいいます。「財布が落ちていたらどうしますか？」「隣の家から煙があがっていたらどうしますか？」といった質問に対して、的確な答えができなくなること。

「高次大脳皮質機能障害」

大脳皮質の障害により起こる症状で、[1] 失語症、[2] 失認症、[3] 失行症

の３つの症状がみられます。
・失語症
　声帯や喉、舌などの肉体的な機能は問題がないのに、言語中枢の破壊により意味のある言葉を話そうとしても声がでない、言葉に詰まってしまう状態。
・失認症
　視力はあるのに、目で見ただけでは物の名前が言えず、手で触ったり匂いをかいだりすると物の名前がわかるというような対象物体を正しく認識できない状態
・失行症
　手足に麻痺はないのに、目的に応じた動作ができない状態
「性格の変化」
　記憶障害の顕在化とともに、性格の変化がしばしば見られます。以前からの性格が極端化する場合と、以前の性格がなくなって全く違う人柄に変わってしまう場合があります。
⑬『認知症の薬物療法』
　認知症の薬物療法は、脳機能の予備力が低下しているため、中枢神経作用薬に対して、過剰の反応または副作用が起こりやすいことに注意され、服薬法をできるだけ簡単にし、家族や介護する人にも十分に理解されるようにされています。
「治療方法」
・見られる症状（中核症状）に対する治療
・うつ、不安、幻覚、妄想、暴力行為、睡眠障害などの周辺症状に対する治　　療
「中核症状」
　アルツハイマー病とレビー小体病は、脳の神経伝達物質「アセチルコリン」が不足するため、その減少を防ぐ作用のある薬剤（アリセプト）が用いられています。その結果、障害されていない神経細胞が効率よく機能するようになり、障害された神経細胞の働きを補ってくれます。（アリセプトは半年～1 年ほど進行を遅らせる効果があるとされていますが、進行を止めるものではないようです。）
「周辺症状」
・幻覚や妄想、焦燥、興奮、攻撃性（暴力行為など）に対しては抗精神病薬
・不安や苛立ちなどに対しては抗不安薬
・不眠や昼夜逆転などに対しては睡眠薬
・うつ症状に対しては気分や意欲に関わる神経伝達物質「セロトニン」や「ノルアドレナリン」を選択的に活性化させる抗うつ薬（SSRI や SNRI など）
・周辺症状である興奮、焦燥感を改善するといわれる「抑肝散」などの漢方薬

⑭『非薬物治療』

・非薬物治療としては、排尿を上手く促すことにより尿失禁の回数が減ることを利用した行動療法
・食事、着脱衣の指導により、患者の行動の改善
・感情を介した心理、精神療法として回想療法、確認療法（バリデーション）（患者の自尊心の保持、ストレスの減少、残在能力の活用などに有用）
・デイ・ケアなどでのグループ活動、ゲーム、手芸、音楽、絵画などへの参加（ADL 低下の抑制に効果）

⑮『リハビリテーション』

リハビリテーションは・脳の各部の機能低下を抑えるための方法（書き取りや計算、音読など）以外に、残された脳の機能に刺激を与えて活性化させる回想法や音楽療法、芸術療法などがあります。

「回想法」

・回想法はアメリカの精神科医ロバート・バトラー氏が提唱した心理療法
・過去の懐かしい思い出を語り合ったり、誰かに話したりすることで脳が刺激され、精神状態の安定を図る効果

「音楽療法」

・好きな音楽を聴く、簡単な楽器（カスタネットやタンバリンなど）を奏でる、歌にあわせて踊る、カラオケで歌うなど、音楽を通じたさまざまな方法で脳を活性化させるリハビリテーション法
・音楽療法は脳を活性化させるだけでなく、気持ちを落ち着かせるリラクゼーション効果もあるため、快眠、笑顔が増えるなどの結果

「芸術療法」

・芸術療法はあらゆる表現手段を利用し、精神状態に働きかける治療法
・ 表現手段としては絵画や粘土細工、陶芸、彫刻、写真、連句、詩歌、俳句、自由画、心理劇、ダンスなど

「日常生活」

・治療ともに重要な役割を果たしているのが、普段の生活におけるケア
・認知症の方は、物忘れがひどくなったり、以前まで出来ていたことが出来なくなったりして、不安な気持ちで生活
・介護する側（家族など）は、認知症特有の行動に困り本人を叱り付けてしまう場合（認知症の方は不安になるばかりでなく、症状も悪化）
・認知症の病気、気持ちをよく理解し、一緒に治療に取り組む

◆脳卒中予防十か条（社団法人 日本脳卒中協会）

手始めに	高血圧から	治しましょう
糖尿病	放っておいたら	食い残る
不整脈	見つかり次第	すぐ受診
予防には	タバコを止める	意志を持て
アルコール	控えめは薬	過ぎれば毒
高すぎる	コレステロールも	見逃すな
お食事の	塩分・脂肪	控えめに
体力に	合った運動	続けよう
万病の	引き金になる	太りすぎ
脳卒中	起きたらすぐに	病院へ

⑯「アルツハイマー型認知症」と「脳血管性後遺症」のほかに認知症の症状が起こる主なものは次のとおりです。

「ピック病」

特有な人格変化、反社会的行動、反道徳的行動を主症状とし、それに認知症が次第に加わっていきます。

「レビー小体病」

幻視（ないはずの小動物が生き生きと見えるなど)、転びやすい。パーキンソン病と同様の歩行障害や認知症を伴うものです。

「パーキンソン病」

動作が緩慢、手足の震え（振戦)、筋肉の萎縮がみられる。初期には認知症はみられませんが、後期にはみられることもあります。

「慢性硬膜下血腫」

頭を打撲した後、脳を包む硬膜の下に出血がおき、脳が圧迫されて起こる病気です。１ヶ月ぐらいしてから、頭痛、不全片麻痺、歩行障害、認知症などがみられます。

「正常圧水頭症」

認知症、歩行障害、尿失禁を特徴とします。髄液圧は正常であるが髄液の吸収障害のため脳室が拡大します。

「脳腫瘍」

脳の中に細菌感染がおこり、膿がたまった状態です。頭痛、発熱、全体倦怠感などが一般症状です。

「脳炎・髄膜炎」

細菌やウイルスなどによって脳や脊髄を包んでいる組織（髄膜）が破壊されることによっておこる病気です。頭痛、発熱、意識障害などがおこります。

「クロイツフェルト・ヤコブ病」

蛋白質（プリオン）が異常な蛋白質に変化して発症します。急速に進行する認知症、不随意運動、四肢麻痺などが特徴です。

「エイズ脳症」

ＨＩＶ（ヒト免疫不全ウイルス）感染末期、最終段階で発症する脳症です。大脳白質、深部灰白質（かいはくしつ）に病変があり、血管の周囲を中心に炎症細胞の浸潤（しんじゅん）がみられるＨＩＶ脳炎と、髄鞘（ずいしょう）、軸索（じくさく）の脱落があるＨＩＶ白質脳症が主にみられます。

「アルコール脳症」

過度の飲酒を繰り返すことで、アルコール依存になり、神経障害があらわれます。

「甲状腺機能低下症」

種々の原因により、甲状腺ホルモン分泌が低下した状態で、無気力、易疲労感、かすれ声、皮膚の乾燥などの症状があらわれます。放置すると認知症や精神・神経症状があらわれることもあります。

「進行性多巣性白質脳症（ＰＭＬ）」

主に大脳白質（大脳皮質の髄鞘に覆われている神経細胞の走行するところ）の髄鞘があちこちで破壊される病気です。免疫機能異常と関係して発症することが多いです。視力障害、構音障害、認知症などがあらわれます。

「進行麻痺」

長い年月、体内に潜伏していた梅毒スピロヘータが脳を侵して発症する慢性脳炎です。認知症症状と手足の痙攣、体の麻痺がおこります。

「頭部外傷後遺症」

転ぶなどして頭を強く打ち命をとりとめても残る様々な障害で、麻痺や言語障害、認知症などがあらわれます。

「多発性硬化症」

中枢神経系の脱髄疾患（髄鞘がこわれる）のひとつです。脱髄斑があちこちにでき、病気の再発を繰り返します。視力低下、四肢の麻痺、しびれなどが主な症状です。

「ハンチントン舞踏病」

性格変化を主とする精神障害と舞踏様不随意運動（特に顔面、手足など）があらわれます。大脳の萎縮、脳室の拡大、神経細胞の障害などが認められます。

「ＡＬＳ様症状を伴う認知症」

ＡＬＳは「筋萎縮性側索硬化症」で、運動神経の細胞が消失していき運動機能障害をおこす病気です。まれだが認知症を伴うタイプがあります。

「大脳皮質基底核変性症」

前頭・頭頂葉の皮質及び皮質下諸核の神経細胞が侵されます。認知症の他に失行、パーキンソン症状、眼球運動障害などがみられます。